

観光コミュニティ学部長メッセージ

観光コミュニティ学部長

坪原紳二

このわずか1、2 ヶ月の間で世界は大きく変わってしまいました。それまでは世界が観光ブームに沸き返り、「観光公害」と呼ばれるほどにまで、大量の観光客が京都、バルセロナ、ベルリンといった内外の都市に押し寄せていました。とりわけ日本では、夏に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることになっており、2020 年には訪日外国人が4000 万を突破すると期待されていました。ところが新型コロナウイルスの影響で、世界中を移動していた観光客は瞬く間に消え去り、訪日観光客はほとんど皆無となってしまいました。経済への影響は多分野に及んでいますが、特に大きな打撃を受けているのが宿泊業をはじめとする観光業界です。加えてみなさんは、外出自粛を求められる中、新学期が始まっても対面授業はおろかキャンパスへの立ち入りも許されず、たいへん不安な毎日を送っているのではないかと思います。

しかし新型コロナウイルスは、悪い面ばかりではありません。経済活動が停滞した結果、深刻な大気汚染に見舞われていたインドの大都市からは、ヒマラヤ山脈が望めるようになりました。ベネチアでは観光客が激減し、運河を行きかっていたモーターボートが姿を消した結果、水が澄み渡り、魚が戻ってきました。アムステルダムでは、昼夜問わず街路を埋め尽くしていた観光客がいなくなり、住民は平穏な生活を取り戻ただけでなく、隣人の顔も見えるようになりました。これら観光地の住民は、コロナ後においても、かつてのような喧騒の再現を決して望んではいません。つまり新型コロナウイルスは、大量生産、大量消費、大量移動、環境破壊型の社会を見直し、観光と地域社会の関係を持続可能なものへと再構築する、きっかけともなり得るのです。こうした方向での観光の再生によって、観光と地域社会を、相互の関係性において学ぶことを主眼とした本観光コミュニティ学部は、またとない学びの場となってくれるはずです。

春学期はすべてオンライン授業となりましたが、これも決して悪い面ばかりではありません。オンライン化されたことでラッシュやバスの乗車待ちから解放され、時間と体力を有効に勉学につぎ込むことができるようになります。また今日は、インターネットを通じて自宅にいながらも世界とつながることができる社会です。アムステルダム市の最新の観光政策や、ニューヨーク市の市民団体の目下の取り組みも、語学さえできれば自宅で調べることができます。もちろん海外の友人と、さまざまな手段で交流することも可能です。オンライン化はこうしたインターネットの可能性を、必然的に気付かせてくれるでしょう。

一方教員は、これまでとは全く違った方法での授業を行うことになり、講義資料を一から組み直し、さらに近年目覚ましい進歩を遂げている情報技術を駆使して、対面授業以上に刺激的な授業をめざして努力しています。最初は失敗もあるかもしれませんが、みなさんの反応を見ながら、毎回毎回改善に努めています。大いに質問をし、議論をし、観光と地域社会の新たな関係を共に考えていきましょう。そしてコロナ後には、お互い一回り成長してキャンパスでお会いし、さらに学外のさまざまなフィールドへと学修の場を広げていけることを願っています。